

「人」として生きる「よりどころ」

大谷大学文学部真宗学科 三木 彰円

※真宗学 — 何を学ぶのか？

※「真宗」という言葉の意味 — 親鸞（1173～1262）の確かめ

「真宗」＝「まことをむねとす」（親鸞『高僧和讃』^{さくん}左訓）

*左訓…^{さくん ひだりがな}左仮名ともいい、文字や言葉の左に親鸞が記した註釈

宗…「むね。おもだったもの。中心となるもの。」

「たっとい（尊）。また、たつとぶ。」（新漢語林 第二版）

むね…「【宗】主とするもの。中心。」（大修館 全訳古語辞典）

「真宗」→真（まこと）を中心とする、尊んでいく。

→真実を「よりどころ（根拠）」として生きる

※私は日頃何を中心としてすごしているのか、何を尊んですごしているのか？

私は何を「よりどころ（根拠）」にして毎日をすごしているのだろうか？

「今あることはあたりまえだ」「みんながそうしているから…」「これが常識だ」

→そのような私たちの「思い」、「思いこみ」の「曖昧さ」「危うさ」

※大谷大学の学び・真宗学科の学び …「寄りそう知性」—「人」として生きる

⇒自己に「寄りそう」、他者に「寄りそう」、その心を見失わずに生きる

「自己」に寄りそう — 自分自身の今現在のあり方に、素直に正直に向き合っていく

「他者」に寄りそう — 自分の「思い」で他者を見るのではなく、自己と他者の立場を公平に見る普遍的な視点に立つことによって成り立つ

親鸞 …「自己と他者の立場を公平に見る普遍的な視点」を釈尊の教え、阿弥陀の本願に見出し、それを「真」、真実と受け止めて生きた人。